図書館だより

第 46 号

秀光中等教育学校
仙台育英学園高等学校
図　書　館
印刷所　本田印刷㈱

ジャック・ライアン・シリーズを読み終えて

秀光中等教育学校
仙台育英学園高等学校
校長　加藤雄彦

「逞しき復興への架け橋」をテーマに第15回ロータリー日韓親善会議が９月28日秋の気配が漂い始めた仙台市で開催されました。今回の大会で一番危惧されたのは国内からの参加者が例年通り集まるだろうか、韓国から来日するロータリアンは果たしてどの位いるのだろうか、両国の平和への希求、友好親善の意義が保たれるのだろうか等々、これらは杞憂に終わり、成功裡に大会は幕を閉じました。

大韓民国とはこの数十年で最悪の日韓関係に直面していると思います。１９１０年８月29日、当時の日本国を表す大日本帝国は韓国併合を行い、１９４５年９月９日に朝鮮半島統治のために置かれていた朝鮮総督府が連合国に降伏するまでの間、同国民に屈従を強い、様々な不幸な出来事が起こりました。これらに起因した対立が激しくなる中、日本政府は今年の８月２日に対韓輸出管理を厳格にしたため、両国の安全保障に係わる重要な事項にまで問題が深刻化していることは憂慮すべき事態だと恐れています。

さらに米中貿易摩擦をはじめ香港、台湾、南シナ海で発生している諸問題は表面的には無関係のように見えるものの、総じて東アジア全体で起きている事を考察すると、地域の安全保障に関連する秩序が崩壊しつつあると言えるのではないでしょうか。

この点に関して、日本経済新聞チーフ・フォーリン・コメンテイターであるギデオン・ラックマン氏は「アジアが奇跡的な経済成長を果たせたのは、この地域が平和で安定していたおかげだ。そうした条件は、１９７０年代半ばにベトナム戦争が終結し、米国と中国の関係が改善したことで築かれてきた。以来、米国は中国の台頭を許すだけでなく、その後押しさえしてきた。中国はその見返りとして、アジア太平洋地域で米国が圧倒的な軍事パワーとして存在感を維持し続けることを暗黙のうちに受け入れてきた。」にも拘わらず、トランプ大統領はこの互恵的関係に懐疑的な行動を就任以来取ってきました。

それに反応するように中国の習近平国家主席も米国の覇権に挑戦状を突きつけた結果、アジア太平洋地域の安全保障の仕組みも微妙に変化し、米国にとっては最重要同盟国であるはずの日韓の反目を制御できない状況に陥ることとなってきたと考えます。

ところで、皆さんはジャック・ライアン・シリーズの中で映画化された５本の作品をご覧になったことはありますか。

『レッド・オクトーバーを追え』（１９９０年）、『パトリオット・ゲーム』（１９９２年）、『今そこにある危機』（１９９４年）、『トータル・フィアーズ』（２００２年）、『エージェント・ライアン』（２０１４年）

これらの映画の中では、錚々たる人気俳優がジャック・ライアンを演じ、原作者である故トム・クランシーがジャック・ライアンを通じて全世界に米国と世界との緊張関係を唱えてきました。

そしてクランシー亡き後はマーク・グリーニーがジャック・ライアン・シリーズを引き継ぎ、最終作『イスラム最終戦争』（２０１９年）を以てペンを置くことになりました。

この長期にわたるシリーズを支えてきた背景には米国とソビエト連邦との東西冷戦、ベルリンの壁の崩壊に象徴される冷戦終結、そして米国の単独覇権時代に勃発し始めた地域紛争の多発化が要因としてあったのではないかと思います。

そして、地域の安全保障の緩みはトランプ大統領が生み出した秩序の崩壊と中国の覇権拡大と呼応して、地政学的に不安定な場所から忍び寄る紛争が拡大し、肥大化する危険性をさらに高めてきたと危惧しています。

平成天皇がご退位の際に発せられた「平成は平和な時代であった。」という言葉の意味を皆さんにはもう一度噛みしめて欲しいと願っています。

令和元年度宮城県読書感想文コンクール

優秀応募作品　対象図書『ひとりでも、君は生きていける。』金川顕教　著

「ひとり戦略」

1M1　大江璃功

「ひとりでも、君は生きていける。」

この言葉をあなたはどのように受け止めるだろうか。今までの私なら「恐怖」や「不安」を感じただろう。だが今は違う。「ひとりでも、君は生きていける。」という本と出会い、「ひとり」という言葉を前向きに捉えることができる。

この本の筆者、金川顕教氏は、高校時代は偏差値の低い学校に通っていた。だが彼には「起業して成功し、経済的に自由になる」という夢があった。その夢を叶える為に二年ほど浪人して猛勉強し、立命館大学産業社会学部に合格。大学在学中に公認会計士試験にも合格。世界一の規模を誇る会計事務所に勤める。わずか三年で辞めて、起業して今では年商十億円の会社に成長させた。この本にはそんな人生を歩んできた金川氏のメッセージがつづられている。

私は、漠然とした夢はあったが行きたい大学などが決まっておらず、悩み続けていた。そんな時、この本を手にし、運命を感じた。「これしかない」と思った。運命を感じた最大の理由は自分自身と筆者が似ている部分があったからである。筆者は学生時代、友達と遊び勉強が得意ではなかった。そこに共通点を感じ、読み終えた時、自分の夢の実現について少し自信を持つことができた。自分にもこんな大きなことを成し遂げられる可能性があるのだと。

学生時代は自分と似ていた筆者が、これだけの成功を収めるのには他の人では到底できないような実践があった。彼が成功した最大の方法は、「ひとり戦略」である。それは、ある時間だけひとりになるのではなく、精神的に完全にひとりになることを意味する。その目的と理由は「自分の目標や夢を見失わない」ことだ。実践としては、遊びの場から消えること。付き合っている仲間の前から消えること。作者はこの「ひとり戦略」を実践し成功を収めた。

この本を読み、最初は私には絶対にできないと思ったが、今の自分を立て直し夢に向かって進むためには自分にこそ必要なことだと考えた。その実践は非常に難しいことだが、できることから始めることにした。人と一緒にいると流されてしまう弱い自分を成長させ力をつけていくためである。

私は筆者の三つの言葉に心を動かされた。一つ目、「周りと同じこと」に意味はない。二つ目、「仲間といる場所から消える」と結果がでる。三つ目、「遊び」「スマホ」「居酒屋」「異性」「テレビ」は成功を阻む五大リスク。周りと同じように、勉強し何かを練習したって成功はない。学力の向上を目指すなら、他の人の何倍何十倍の努力をしなければ結果には結びつかない。

実際、私自身もこのような体験がある。小学生の頃、少年野球をしていた私は、ある時試合で打つことができなくなってしまった。そこで普段の練習を終えた後にもひとりで練習するのが私の日課となった。すると徐々に打てるようになり、打率はチームトップになった。練習の結果が目に見えた瞬間だった。あの時の自分がよみがえり、私は決意した。この体験を勉強に活かす。努力は必ず報われることを信じる。

しかし私には大切なクラスメイトがいる。筆者のように距離を置くのは不可能だと思った。だから私は自分の中でルールを作った。「勉強する時は必ずひとりになる。」「無理に自分から話さず話しかけられたら丁寧に受け答えをする。」このルールを守ること。こうすることにより「ひとり戦略」を自分なりに実践しつつ友達との関係を崩さずにいられる。何よりも自分の目の前にある目標を失わないメリットがたくさんあることに気づいた。

特に五大リスクのうち「スマホ」「遊び」は最大の敵だ。楽しい時間はあっという間に過ぎてしまう。今までの私は、スマホや遊びに時間を掛け過ぎてしまい、勉強にも集中できていなかった。だがそんな私にも変わる転機が訪れた。今年の夏休み期間中に参加した学校の勉強合宿である。合宿では三日間スマホが禁止されており、そのおかげでスマホから離れ、距離を置くことができたのである。とても良い環境で集中して勉強し、自分の悪い癖を少し改善できたと思う。

気づけばもう高校生。大学受験が控えている。今から「ひとり戦略」を実践すれば自分の目標としている大学の合格、新しい夢にも近づけるはずだ。新しい夢とは、「公認会計士か税理士になる」ということ。この職業に就くことは困難と言われているが「ひとり戦略」を胸に努力していこうと思う。

人生や自分を変えるきっかけを作ってくれる本との出会い、その本が与えてくれる知識、新しい発想や思考、実践の記録などは生涯の宝物になる。この本との出会いによって、私は変わることができた。強い心を持ち一歩一歩夢の実現に向けて歩んでいく。

令和元年度「本の探究者賞」（年間多読賞）結果

（4月1日～11月30日）

◆【1位】……7名
◆【2位】……4名
◆【3位】……4名
◆【努力賞】……18名

今年度は20冊以上借りた生徒全員を表彰し、1位から3位までにはさらに賞品を贈呈しました。来年度も開催予定ですので、みなさんたくさん本を読んでくださいね。

■宮城野校舎

高1
【1位】……96冊
【2位】……96冊
【3位】……51冊
【努力賞】……10冊

高2
【1位】……256冊
【2位】……106冊
【3位】……105冊
【努力賞】……6冊

高3
【1位】……99冊
【2位】……74冊
【3位】……54冊
【努力賞】……2冊

優秀応募作品　対象図書『卵の緒』　瀬尾まいこ　著

「家族のカタチ」

1M1　久道眞優

「卵の緒」という本を読み終えたとき、胸の中に温かくて優しい気持ちと同時に言葉では言い表せない何かが私を襲った。かわいそうという感情だろうか。息苦しさなのか。この作品はカタチが違う二家族の物語が描かれている。表題作の「卵の緒」は血のつながりがない母子についての物語。

物語は、「僕は捨て子だ。」その一文から始まる。育生は一緒に住んでいる「母さん」とは血はつながっていない。彼は自分が捨て子だということに気が付いているのである。その証拠に「母さん」はへその緒を見せてくれない。それでも、「母さん」は真剣に愛情を伝えている。へその緒の代わりに卵の殻を見せ、卵で産んだのだと言う。「母さんは、誰よりも育生が好き。それはそれはすごい勢いで、あなたを愛してるの。今までもこれからもずっと変わらずによ。」と。

私の考える幸せな家庭は、優しくてしっかりした父と母がいて子どもに愛情をそそぎ家族が一緒に成長をする家庭。それが家族のカタチであり、理想の家庭だと思っていた。しかし、この家庭は違う。父はいない、それに加えて母も血はつながっていない。この家族はそんな私の思い描いていた理想の家族のカタチにはなれない。しかし、愛情は理想の家族と同じくらいある、いやそれ以上あるかもしれない。愛情というものを比べることはできないが、確かにこの親子には愛情がある。ストレートに「愛している」と気持ちを伝えることはなかなかできないことではないだろうか。

「卵の緒」では血のつながりがないからこそ、一生懸命愛情を伝えようとしている。読み終わったとき、読み始める前と比べて、私の中で理想の家族のカタチが変わった。血がつながっていなくても大切な人は大切で、家族という基準は人それぞれであり、愛情を伝えることの大切さに気づいた。

二つ目の「7ｓ ｂｌｏｏｄ」は、父は同じで母が違う姉弟の物語。小学生の七生と高校生の七子は父は亡くなっている。二人は違う母のもとで暮らしていたが、七生の母は服役中で、七生は虐待を受けていた。その後、七生は七子の家族の所に引き取られる。七生は両親もおらず、「食べるのも住む場所も、一人じゃどうにもできない」少年。そんな彼が身につけたのは、無邪気さや気の利いた行動をすることだった。しかし、それは相手の顔色をうかがってのものだ。「生きる術」を身につけないといけない環境で育った彼に七子は子どもの本来の姿を教える。ぎくしゃくしていた関係も時間をかけて、心の隔たりから絆に変わる。七生は子供らしさを取り戻していく。やはり家族のつながりは強い、私はそう感じた。たとえ今まで一緒に暮らしていないという家族のカタチでも絆はつながっていた。

家族――血がつながっていても離れ離れの家族、関わりがない家族、仲が良くない家族もいるだろう。それでもそれぞれカタチは違っても家族は家族で、変えることはできない。そして、これが正しいという家族のカタチもないはずだ。しかし一方で悲しい家族のカタチもある。私はニュースで虐待を受けていた子供が亡くなるといった事件を何度も見る。家族は家族でもそのような悲しい恐ろしい家族のカタチもあるのだ。「家族」というつながりは、時として人間を傷つけ、壊してしまうこともある。

では「家族」とは何だろう？と考えてしまう。「家族」という言葉は、それだけで人のつながりや理想の家庭の姿、自分を囲む世界をひとまとまりにしてしまう不思議な言葉だ。私は、時々その言葉にとても息苦しくて、狭い檻に閉じ込められたような気分にもなる。シンプルだが難しい言葉。

私は最初に「かわいそうといった感情や息苦しさに近い何かが襲った」と書いた。かわいそうという言葉には二つの心理がある。一つ目は、相手を思う気持ちからなるもの、二つ目は、自分はかわいそうじゃなくて良かったという優越感だ。きっと私は読み終えたときは相手を思う気持ちより優越感の感情のほうが強かったと思う。しかし、家族のカタチを見直した今、この二つの家族に対してかわいそうといった感情は消えた。むしろ今はどちらの家族のカタチもとてもすてきだと思っている。そして、自分の感じる「息苦しさ」は自分の狭い価値観のせいなのだと気づかされた。

家族になるのに血のつながりは関係ない。本来、家族のカタチは多種多様で縛り付けられるものでもない。私は育生や七生が教えてくれた人のつながりの大切さ、その温かさを知った。世の中にはいろいろな家族のカタチがある。だから、「家族」という固定概念にとらわれず、人と人との間の本当に大切なもの――お互いを思いやる心、愛を伝えあうこと――を見失わないように生きていこうと思う。

■令和元年度 宮城野校舎図書館利用統計　（11月30日現在）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	計
冊数(冊)	220	317	190	494	151	306	514	551	2,743
人数(人)	688	855	1,289	1,281	494	1,460	1,480	1,799	9,346

■令和元年度 多賀城校舎図書館利用統計　（11月30日現在）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	計
冊数(冊)	98	95	109	202	40	135	120	74	873
人数(人)	372	489	502	600	197	505	464	469	3,598

■多賀城校舎

高1　【1位】……30冊　【2位】……27冊

高2　【1位】……21冊

高3　【1位】……27冊　【2位】……23冊　【3位】……20冊

おすすめの本教えてください

みなさんのおすすめの本を教えてもらいました！ぜひ読んでみてくださいね！

『無名作家の日記』菊池 寛

作家の苦悩を描いた短編小説である。彼の同期が華々しく文壇にデビューしたことへの羨望や、彼らの文学的才能に強い嫉妬と劣等感を赤裸々に描写したものだ。しかし、こういった単純な人間心理にユーモアを感じてしまうのがこの作品の良い所である。

『砂漠』伊坂 幸太郎

仙台市の大学に進学した青年の物語。大学で4人の学生と知り合う。一瞬で過ぎる日常の中で様々な出来事が起こる。そんな彼らの日常は、光と痛みと小さな奇跡でできていた。この本を読むと、明日の自分が愛おしくなる。

『よるのばけもの』住野　よる

夜になるととても大きいばけものになる男の子とちょっと変わってる女の子のお話。現実味が程々にあって程々にないのがちょうどよくて、おもしろいお話なのでどんどん読み進められます。

『変身』フランツ・カフカ

このお話は、ある日主人公が毒虫になってしまう話です。色々考えさせられるお話なので強く印象に残ります。

『本を守ろうとする猫の話』夏川　草介

本好きにはたまらない、名言集がたくさん出てきます。本を大切に扱わない人や、長くて読みたくない人へのメッセージがとても心に響きます！

『夜のピクニック』恩田　陸

複雑で、切ない関係の中でそれぞれの想いが鮮やかに書き出されています。私は主人公を自分に重ね合わせてしまうシーンが多く、一気に読んでしまいました！

『かがみの孤城』辻村　深月

様々な事情で、学校に行けない子供達の物語を書いた感動ストーリー。子供達の成長を見ていくなかで、とても共感できることや、きづかされることなどがあります。

『桜の森の満開の下』坂口 安吾

坂口安吾の独特の文章形態と、幻想的で無気味な物語の世界観が合間って、なんとも言えない読後感があります。

『車輪の下』ヘルマン・ヘッセ

文章がとにかく美しく、浮かぶ情景、思春期特有の葛藤、人物の心情がこれでもかと鮮明に描写されている。

『カラフル』森 絵都

生前の罪で輪廻のサイクルから外された「ぼく」。だが、天使業界の抽選に当たり自殺を図った少年の体にホームステイすることになるが…

『屍人荘の殺人』今村 昌弘

ミステリーの裏で人間の生き方の切なさなどが物語られていて様々な感情を湧き上がらせるような１冊になっています。

『乱世少年』蕭 育軒

「極悪人」の名を着せられた少年が文化大革命一色の乱世を渡る中国児童文学の傑作。

『人魚の眠る家』東野　圭吾

生きているとはどういう状態なのか、考えさせられる1冊！